

えられる。しかしながら主命を忘れ、池田隊が想定外の城攻めにかかったことにより部隊全体が足止めを余儀なくされたことが、後の戦局展開に大きな影響を与えることになる。後方、白山林（今の尾張旭市南西部から名古屋市守山区四軒家地区一帯）において、第四軍団・三好秀次の本隊が、密かに忍び寄った徳川方先



わが国初の常電導方式のリニアモーターカー(リニモ)の長久手古戦場駅より「愛・地球博」の会場方向を望む(写真下)

遣隊の、背後からの奇襲を受け、敗走した旨の知らせが届くのは、池田勝入父子が岩崎城北方の六坊山で首実検をしている最中であつたという。

羽柴方の軍勢は、先頭から池田勝入・之助父子、森長可、堀秀政、三好秀次の四軍が縦一列の進軍をしてきたが、最後尾の三好秀次軍に徳川方の先遣隊が襲い掛かったのは、三好軍が四月九日早朝、白山林で休憩かたがた朝食を摂っている、まさにその時であつた。四月六日夜半に犬山を出た羽柴方の動きを察知し、八日午後小牧山から密かにその後を追った徳川先遣隊は、夜明けを待って、敵の背後から一気に攻め立てる。突然の奇襲に狼狽した三好軍は、またたく間に総崩れとなり、総大将三好秀次に至っては、家臣・木下勘解由左エ門利定に馬を借り、その木下勘解由とその弟・木下周防守利直らの、身を挺しての懸命の奮戦の中、かろうじて戦場を離脱したほどであつたという。

名古屋市の東方、地下鉄の藤が丘駅近郊の白山林一帯は、今や著しい都市化の進展やマンシヨンの林立で、木下勘解由の戦死の地を示す石碑がなければ、ここが往時の戦場・激戦地であつたことを想像するのは容易ではない。

三好軍を撃破した徳川先遣隊は、敗走する三好軍追

撃の勢いに乗って、先方の神明の森付近に陣を敷く堀秀政軍の方角へ向かう。戦上手で知られた堀秀政は、時ならぬ後方の銃声と轟きに非常事態を察知し、急ぎ松ヶ根の高台に陣を布き待機。斜面にならべた鉄砲隊からの、香流川を渡りくる敵を十分に引き付けての一斉射撃とそれに続く突入に、今度は榊原隊等の徳川方先鋒部隊は、思わぬ反撃に体制を立て直す間もなく甚大な被害を出し、たまたらず岩作・猪子石方面に潰走する。堀秀政は、岩作方面に追撃を始めるが、その時、前方の色金山の山頂に徳川家康の金扇の馬標が立つのを見て驚き、長居は無用とばかり自軍をまとめて戦場を離脱する。現在、その松ヶ根の高台には町立図書館があり、堀秀政の陣地跡を記す碑は、敷地内・松ヶ根公園の一角に移されているが、松ヶ根の高台から香流川・白山林方面を望むと、「騎馬武者を撃ち落せば百石を加増するぞ」と鉄砲隊を励まし、川を渡って襲い掛からんとする徳川方を引き付けて一斉に狙い撃ちさせた様子が髣髴とされる。長久手の合戦中、堀秀政の手によって、唯一羽柴方が徳川方に勝利したのが、ここ松ヶ根の戦いである。

徳川家康は、決戦当日の四月九日午前二時ごろ、揃いの甲州流一色赤備の甲冑に身を包んだ井伊直政の軍

勢を前衛として、先に入城していた小幡城を出陣。前衛隊・井伊直政軍三千、本隊・徳川家康軍三千三百、予備隊・織田信雄軍三千の軍勢は、小幡城から大森・印場を経て稲葉付近で矢田川を渡河し、長久手に入る。家康は本地・権道寺・市の坂を経て色金山に到着。家康は、敵情が一望できる色金山で軍議を開いたというが、山頂にはその時家康が腰を下ろしたと伝えられる巨岩(床机石)がある。

家康は進軍中に、白山林の戦いに勝利し、三好方の敗残兵を深追いする味方先遣隊の大須賀・榊原らの兵と遭遇し、次には自ら放った斥候によって、今度は味方が堀秀政に打ち破られたことを知り、また実際に先遣隊が潰走するのを目にし、勝ちに乗じた堀秀政軍が前方の池田・森の軍勢と合流しないうちにその寸断をはかるべく、急ぎ色金山から軍を進め、富士ヶ根(今の御旗山《家康が馬標をかかげたことから、その名がある》)に陣を敷く。松ヶ根から富士ヶ根は目と鼻の先。まさに先方、日進で岩崎城攻略を終えた池田軍ならびに森軍と堀秀政の軍の間に楔を打ち込み、分断する形での家康の進軍で、事態はいよいよ次なる戦い「仏ヶ根」の決戦に移ることとなる。

池田勝入父子に、後方第四隊の三好秀次軍敗走の一